

近世都市における宝蔵と文書「管理」

—播州三木町を事例として—

渡 辺 浩 一

はじめに

最近、近世における文書管理史の研究も個別の研究が蓄積されて来つつある。これらの諸研究を眺めていると、明らかに二つの潮流が存在するように思える。一つには、富善一敏氏や保坂裕興氏に代表される、村方文書全体の文書管理のシステムを明らかにすることを基本としつつ、村落社会の特質やその変化の様相を描き出そうとするものである。⁽¹⁾藩における研究や、大店三井・仲間組織における研究も、基本的にはこの潮流に属するものと思われる。こうした動向を受けて、近世社会全体における文書管理の様相を総括しようとする論考も現れた。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

それに対して、大友一雄氏は、村の特権にかかわる重要文書の保管の問題を取りあげた。⁽⁵⁾同様の関心は都市の研究においても存在し、例えば河内将芳氏は京都の「御朱印」という都市の特権を証明する文書の保管システムと儀礼行為を明らかにした。⁽⁶⁾筆者も河内論文に導かれつつ播州三木町の秀吉高札をめぐる儀礼・儀礼装置（宝蔵・「義民」碑）・言説の諸問題について分析することにより、文書管理儀礼行為発生の社会的背景や社会関係への展開を明らかにしたつもりである。⁽⁷⁾

これら二つの潮流は、相互に密接に関係しつつも、その関心において見事な対照を描き出しているように見える。前者においては、当該の集団が近世社会固有の価値体系の中に自らを位置づけ、その位置づけにおいて集団が存続していくために保持していくことが不可欠の文書（以下、存在証明文書と呼ぶ）についての考察を欠いているという問題点を指摘することができるだろう。近世における文書の保管行為は、純粹に管理という概念に収まりきらない側面を持っているのではないだろうか。⁽⁸⁾逆に後者の潮流においては、存在証明文書の保管の具体的様相や、その社会的背景を明らかにしたが、その集団が日常的に機能していくための膨大な文書群が存在証明文書といかなる関係を持って「管理」されていたのかという関心を持ったときに、全面的な回答を行う段階には到達していない。

そこで、本稿では、以上二つの文書「管理」史研究の動向を橋渡しするための基礎作業を行うこととしたい。その事例は、拙稿注⁷と同じ播州三木町である。三木は、一つの小さな地方都市に過ぎないが、惣町―組合町―個別町という重層構造⁽⁹⁾を持っているという点で、近世都市一般と共通する特質を持っている。また、小さいが故に全体の文書「管理」システムが把握しやすいという利点があるということもできるだろう。具体的な分析は近世段階で作成された目録の分析である。その場合注意したいのは、文書「管理」史研究は目録のみを取り上げて表面的に分析するだけで満足してはならないということである。目録に記載されている文書がなぜそこに載っているのかを現存史料に立ち戻って吟味する必要がある。⁽¹⁰⁾そうすれば、その集団や地域社会にとつての文書「管理」の意味が見えてくるのではないだろうか。

一、三木町とその史料

本稿では、三木町の文書「管理」を明らかにしようとするものであるから、まず、三木町において「管理」される

対象となる文書について述べなければならない。

三木町は戦国期においては別所氏の城下町であった。戦国城下町としての三木については詳らかにし得ない。信長政権のもとで中国戦線を担当した羽柴秀吉により天正八（一五八〇）年正月三木城は落城し、別所長治は自殺する。この時、秀吉の制札が出される。

〈史料1〉（宝蔵一）¹¹

条々

一 当町江於打越者ハ、諸役あるへからさる事

一 借錢借米年貢之未進、天正八年正月十七日より以前之事ハ令免許事

一 き事 付商之さかり錢これを

のそくへき事

一 一粒一錢 有之輩におゐてハ、直訴すへき事

一 をしかいあるましき事

右あひそむくやからにおゐてハ、速ニ可加成敗者也、仍而如件

天正八年正月十七日

秀吉（花押）

従来この制札の第三条を、後世に作成された写に従って、「先年之通地子取ましき事」と読むことにより地子免許が認められ、近世において地子免許の特権を持つ郷町として存在しつづけたと考えられていた。¹²しかし、小島道裕氏により、制札写の地子免許文言は改竄であり、実際は元和三（一六一七）年ごろ三木城の破却に伴い訴願により地子免許を獲得したものと推定されている。¹³その時の文書が以下に掲げるものである。

〈史料2〉(宝蔵五)

三木城主無之付而、町人堪忍不成、端々町屋も明候付而、御訴訟之段被聞召分、人足并地子米免置候者也、仍如件

「寛永九年」(異筆)

市川 惣助(花押)

二月十二日

原 与右衛門(花押)

三木町中

その後、次の領主水谷伊勢守も以下のとおりこの時の地子免許を確認している。

〈史料3〉(宝蔵八)

三木惣町中地子并諸役等、任先代之証文、被令免許者也、仍如件

寛永拾七年辰九月十一日

鶴見内蔵助

秀次(花押)

三木町中

ところが、三木町における最初の検地が延宝五(二六七七)年に行なわれ、これを契機に年貢が賦課されそうになる。そこで後に「義民」碑となる江戸出訴が行なわれることとなるのだが、この時に秀吉制札が改竄を受けたのであろうというのが小島説である。江戸出訴の結果地子免許は認められ、そのことが以下のように検地帳末尾に記されることとなった。

〈史料4〉(宝蔵五七三)

(前略)

反合拾四町四反八畝拾八歩

分米合百八拾八石三斗壹升八合

外六反二拾壹歩 四壁除之

右者播磨国三木郡三木町屋敷検地依被 仰付候、六尺間竿を以壹反三百歩之積遂検地、今度高結候処、従跡々地子御免許之旨ニ付而、御勘定御奉行所江得御下知、先規之通先地子御免除被成下者也

松平大和守内検地惣奉行

延宝七巳未年五月

安福宇右衛門 ㊦

本ノ

林 甚五左衛門 ㊦

(以下略)

以上の経過から、地子免許特権の根拠となる文書として、①秀吉制札(史料1)、②地子免許状二通(史料2・3)、③検地帳(史料4)の三件の文書が三木町にとって最も重要な文書であることは明らかである。

これらの文書を保管するために元禄七(一六九四)年に土蔵が本要寺境内に建設されている。当初は秀吉高札専用の蔵であったが、元禄一六(一七〇三)年からは、他の二つの文書、つまり地子免許状二通と延宝六年検地帳もこの蔵に保管されることとなった。また、この頃からこの蔵は「宝蔵」と呼ばれるようになる。同時に毎年六月一八日に町中役人立合のうえ宝蔵を開き虫干しが行うことも取り決められた。この行為は、単なる曝涼ではなく、文書の点検と、秀吉により与えられた地子免許とそれを維持した延宝の江戸訴願を想起するための記念行事であった。⁽¹⁴⁾

次に三木町の町制の概略を述べることによって、日常的に文書を授受・作成する主体として、三木町にはどのような

表1 播州三木町の戸口

	1679年 屋敷地数 ¹⁾	1742年 竈 数 ²⁾	1804年 戸数/人数 ³⁾	1845年 家 数 ⁴⁾
上町	29		39 195	44
新町	9		54 220	58 (内40前田町)
中町	57		73 364	72
明石町	84		128 549	126 (内16前田町)
下町	89		175 869	204 (内71前田町)
下五ヶ町計	268		469 2197	504 (内127年貢地に建家)
東条町	30		68 285	50 (内平山町18)
大塚町	73		137 302	64
平山町	55		63 290	67 (内6平山町)
滑原町	44		103 515	99 (内65平山町)
芝町	45		57 208	48
上五ヶ町計	247		428 1600	328 (内89年貢地に建家)
町方合計	514	615		616
年貢地計	0	168		216
総計	514	783	897 3797	832

典拠1) 延宝7年5月「三木町屋敷地検地帳写」(宝蔵573)

2) 寛保2年11月「播州三木町諸色明細帳」(宝蔵63)

3) 文化元年11月「三木町家別人数并諸商売書上」(宝蔵66)

4) 弘化2年7月「家数取調帳」(宝蔵71)

なものが存在するのかを概観しておこう。三木町は町方と地方に大別される。町方は十ヶ町からなり、上五ヶ町と下五ヶ町の二つの組合町に分かれる。その構成と文化元年時点の戸口は表1の通りである。なおこの十ヶ町の部分が地子免許(のちに無年貢地)とされている。町役人としては上五ヶ町と下五ヶ町にそれぞれ惣年寄(大年寄ともいう)がおり、個別の町それぞれに町年寄がいた。下五ヶ町の惣年寄十河家は世襲であり、上町の町年寄を兼帯している時期もあった。上五ヶ町の惣年寄と個別の町の町年寄は交替制である。なお惣年寄十河家は、慶長一五(一六一〇)年から元和三(一六一七)年にかけての池田氏支配下において代官的豪商として三木地方の行政にあたっていた与瑞という人物の子孫と推定されている。一方、地方には平田町・大村町・前田町・加佐町・平山町・大塚町の六つの村請制の村があり、この六村の石高には年貢が賦課されていた。本来は地方部分には居住

表2 三木宝蔵に現存する文書保管容器

種別	墨書など	墨書位置	外形寸法	材質	塗装	蓋固定用具	備考
①帳箱	三木町御検地 御免許帳并御 領主御代々御 証文諸書物入	蓋表	490×325×250 (縦×横×高mm)	杉	弁柄	錠前用金具	角金具で 四隅を補 強
②唐櫃	(なし)	—	473×1052×963	杉	白木	錠前	
③帳面箱	御免許帳	蓋表	352×259×61	桐	白木	紐	
④文箱	御証文箱	蓋表	282×90×95	不明	白木	紐	
⑤帳箱	丙慶応二寅二月 古来より之諸 書物入 拾箇町	側板	663×412×385	杉	白木	なし	半壊状態
⑥帳箱	西角屋所持 西角屋の焼印	蓋裏	660×285×247	不明	なし	紐	

注) 各容器に近世段階から収納されていたと考えられる文書は入っていない。

者が存在せず、町方の町人が地方の田畑の名請人となっているとい
う関係にあった。地方の町には庄屋（町方居住）が存在し、年貢納
入その他の村役人としての職務を行なっていた。⁽¹⁵⁾

二、宝蔵保管文書

まず、最初に近世後期における宝蔵保管文書の「管理」形態を見
てみたい。前節では三木町にとって最も重要な文書として三点を挙
げた。ここでは、それらを含んだ宝蔵保管文書のおそらく全体と思
われる文書群について検討する。

現在の三木の宝蔵の中には、表2のように近世のものとされる
保管容器がある。このなかで、②の唐櫃には秀吉高札が収納されて
いたものと推定される。というのは、文化六（一八〇九）年の「御
高札唐櫃・宝蔵修覆入用割帳」（宝蔵一三六）という帳簿が残されて
おり、表題の文言からこの時点で高札が唐櫃に収納されていたこと
は間違いないからである。⁽¹⁶⁾

保管容器の中で最も注目されるのは、①の帳箱である。蓋表の墨
書からこの帳箱には延宝検地帳、歴代の領主が発給した地子免許状
などが収納されていたことがわかる。蓋裏には、重ねられた形で二

つの貼紙がある。これらは、注11に記した「三木町有古文書目録」に記載されず、したがって三木市の写真帳にも収録されていないので、以下に全文を引用する。

〈蓋裏貼紙1〉

覚

a 一御免許帳入箱一つ

b 一御領主御証文入箱一つ

c 一御免許二付諸書物入

六月十八日

〈蓋裏貼紙2〉

安永貳歳癸巳六月十八日改

諸書物之覚

1 一御免許帳

一冊

2 一 小笠原右近太夫様御証文

一本

3 一 水谷伊勢守様御証文

一本

4 一 松平大和守様檢地役人中

当名之御証文

一本

并写有

5 一 黒田豊前守様御証文

一本

并御奉行吉田弥野右衛門様御証文

一本

(追筆)
六

6 一堀田相模守様御証文

一本

(追筆)
五

7 一酒井雅楽様御証文

一本

(追筆)

一高木井堰裁決状

壱通

(追筆)
七

8 一松平右近将監様御証文

一本

9 一大岡喜右衛門様御証文

一本

10 一御免赦之記

一冊

(追筆)

一松平兵部太夫様

11 一役銀御免願覚書

一冊

12 一覚書

一冊

13 一役銀割付帳

一冊

14 一弁書
証

一冊

15 一小書物

十四本

(以下追筆)

- 16 寛政十年并享和三亥年分
一宝蔵附諸具并御領主様御位牌所
附之諸道具帳

壹冊

- 17 一三木町来由記

文政七年申六月十八日納

壹冊

貼紙1は貼紙2の下に貼られているので、その年代は安永二(二七七三)年以前ということになる。また、二つの目録の日付がいずれも六月一八日であることに注意したい。目録作成という行為は、虫干し行事Ⅱ地子免許維持の訴願運動を想起する記念行事と密接に関わっていたのである。

さて、この二つの目録から文書と容器の関係を考察すると以下のようになる。貼紙1の目録に書き挙げられているのはいずれも保管用器であり、aが表2③の帳面箱、bが④の文箱にそれぞれ該当するということは明白であろう。さらに、貼紙2の史料名から判断して、aⅡ③の帳面箱には1の史料が、bⅡ④の文箱には2Ⅱ9の史料が、そして形態不明のcの「諸書物入」には10Ⅱ15の史料がそれぞれ収納されていたことはほぼ間違いないものと思われる。したがって、前節で紹介した三点の重要文書は、物理的には以下のように保管されていたことが判明する。秀吉高札は②の唐櫃に納められていた。また延宝検地帳は③の帳面箱に、地子免許状は④の文箱にそれぞれ納められて、さらにその二つの箱は①の帳箱に収納されていたのである。

ちなみに、この安永二(二七七三)年の目録では延宝検地帳が「御免許帳」という文書名称を付与されていることがわかる。宝永五(一七〇八)年の江戸訴願の段階では「御検地帳」であった(宝蔵三三)。それが、地子免許であることの証拠文書としての認識が強固になってくると、検地帳本来の機能よりは、奥書に地子免許文言が存在するとい

表 3 宝蔵帳箱文書目録と現存史料の対照表

保管 容器	安永2年宝蔵帳箱目録 (蓋裏貼紙2)	現 存	年月日	原表題 (内容)	作成者→宛先
順番	文書名	数量	史料番号		
③	1 御免許帳	1冊	573 延宝0705	播磨国三木郡三木町屋敷検地帳 (十ヶ町分、末尾に地子免許文書あり)	松平大和守内陸地惣奉行安福宇右衛門ほか、庄屋案内之者14名→
2	小笠原右近大夫様御証文	1本	5 元和030212	(小笠原右近大夫地子免許状)	市川惣助・原与右衛門→三木町中
3	水谷伊勢守様御証文	1本	8 寛永170911	(水谷伊勢守地子免許状)	鶴見内蔵助秀次→三木町中
4	松平大和守様検地役人中 当名の御証文 并写有	1本	9 延宝0641225	(幕府勘定奉行地子免許指達状)	甲斐喜右衛門ほか2名→松平大和守 殿検地役人中
5	黒田豊前守様御証文 并御奉行吉田弥野右衛門 様御証文	1本 1本	16 正徳0108 14 正徳0107	覚 (無年貢地証文) (役領免許指達状)	戸川平次兵衛ほか3名→ 吉田弥野右衛門→三木町大庄屋大年 喜徳町人
④	6 堀田相模守様御証文 酒井雅榮様御証文 (追筆) 高木井履裁決状	1本 1本 1本	19 延宝02- 18 寛保0307 *667 延享040319	(無年貢地証文) (無年貢地証文) 差上申一札	小田川代右衛門ほか2名→三木町町人共 村井金左衛門ほか1名→三木町町人共
7	松平右近将監様御証文	1通	20 延享05-	覚 (無年貢地証文)	三木大宮八幡別当院代有住・三木 町・高木村→御奉行所
8	大岡喜右衛門様御証文	1本	*88 元禄0609	口上之覚 (検地帳等の保管につ き差図)	井上兵衛ほか6名→三木町町人共 大岡喜右衛門 (代官)→三木町年寄中
①	10 御免赦之記 (追筆) 松平兵部太夫様	1冊 (現存せず)	延宝064 21 天保1406	覚 (無年貢地証文)	山中弥八郎重清ほか3名→三木町町 人共
(諸 書物 人)	11 役領御免願覚書	1冊	1330 宝永0508	覚書 (江戸での交渉過程の記録)	
12	覚書	1冊	32 宝永0507	覚書 (三木出發までの記録)	
13	役領割付帳	1冊	1106 宝永0602	三木町役領割帳	
14	并証	1冊	*38 宝永0402	東播三木町并証碑陰	福田尚任謹識→
15	小書物	14本			
16	寛政十年并享和三亥年分 宝蔵附諸具井御領主様御 位階所附之諸道具帳	1冊	144 寛政1006	御宝蔵附井御位牌阿所諸具扣帳	
17	三木町来由記 文政七年甲六月十八日納	1冊 (現存せず)		黒田清右衛門家文書「三木町御免許大 意録」(三木金物問屋史料)所収)	

*は、かなりの推定を含むことを示す(表5においても同じ)

うことの方がむしろ重要となってくるのであろう。宝蔵という存在証明文書の保管庫に収納されて時間が経過し、虫干し行事（創られた伝統）の装置の一つが繰り返されることによって、当時の三木の社会のなかでの本文書の性格が変化したことができる。宝蔵の「結界」としての威力は文書名称の変化をもたらしているのである。

三点の重要文書以外の宝蔵文書が、具体的にどのようなものであったのかを把握するために表3を作成した。これによれば、④の文箱には一七世紀の二通の地子免許状だけではなく、その後の領主の交代の都度に発給された無年貢地証文と一緒に収納されていることがわかる。元和三（一六二七）年の小笠原右近大夫の入封以後の、三木を支配した全ての大名が地子免許状もしくは無年貢地証文を発給している。なお、幕領期が元和七（一六二二）年から寛永一四（一六三七）年までと、寛永一九（一六四二）年から宝永四（一七〇七）年までの二度あるが、この間頻繁に交代した代官はこの種の文書を発給していないようである。ここでの無年貢地証文について若干のコメントを加えたい。宝永四（一七〇七）年に領主が常州下館黒田氏に交代したとき、三木十ヶ町の地子免許地に地子が賦課されそうになる。これに対して三木町は代表を江戸に派遣して訴願運動を展開した結果、三木町は役銀を負担することとなった。しかし、その負担も三年間だけで正徳元（一七一二）年には訴願の結果免除される。実質的には地子免許は維持されるのであるが、これ以後の領主交代時に新領主から発給される文書では地子免許文言は消滅し、「無年貢地」という表現に変化するのである。地子免許と無年貢ではかなりの格の差が存在すると思われるが、この目録では「御証文」という同一の表現である。また、近世後期の三木の由緒書のなかでは、地子免許から無年貢地への変化には全く注意が払われていない。¹⁸つまり、三木町としてはこの変化を意図的かどうかかわからないが無視しており、そうした認識が一七世紀の二通の地子免許状に引き続いて、無年貢地証文を発給の都度ごとに同じ文箱に追加しつづけた行為をもたらしめているのである。

表4 宝永5年江戸出訴持参文書 (宝蔵32)

順番	文 書 名	表3 順番
1	御高札 同写	
2	御検地帳	1
3	御検地帳之写	
4	御勘定所様御書之写	4
5	小笠原右近大夫様御証文	1 通 2
6	水谷伊勢守様御証文	1 通 3
7	西山六郎兵衛様三木町 御免許御吟味被遊候口上書	
8	大岡喜右衛門様御裁判書	9
9	碑文 1 冊	14
10	延宝6年御免許記 1 冊、同写 1 冊	10
11	御林大辻之外覚書	
12	御家中様扇子覚書	
13	村々高帳	
14	御林山訴状控 2 通 外ニ諸書物	

それ以外の史料としては、まず10、12の延宝や宝永の江戸訴願の記録がある。二度の江戸訴願は地子免許の特権を維持するための行為であるから、その記録は、今後の訴願のために書き残され保管されていると思われる、その宝蔵保管理由は明白である。14の「御免赦之記」は現存史料のなかに該当するものは見あたらないが、宝永五（一七〇八）年の江戸出訴の時に、江戸へ持参した文書のリスト（表4）のなかに「一、延宝六年御免許記 一冊、同写一冊」とあるので、延宝六（一六七八）年の地子免許維持の最初の訴願の記録である可能性がある。また、14の「弁証」とは宝永四（一七〇七）年に建設されたいわゆる「義民」碑のことである。詳しくは注7の拙稿を参照していただきたい

が、領主交代にあたって地子免許の危機が訪れたとき三〇年前の延宝の江戸訴願が強く想起され建立されるに至ったものである。これは、宝蔵と共に八秀吉による地子免許という「創られた伝統」を維持する装置の一つであった。その碑には地子免許の由来が漢文で刻まれており、その写しが宝蔵帳箱保管になっているわけである。

次に、13の「役銀割付帳」とは何だろうか。これは宝永六（一七〇七）年二月「三木町役銀割帳」（宝蔵一一〇六）に該当すると思われるので、先述した下館黒田家領となった宝永五（一七〇八）年から三年間だけ負担していた役銀の割付帳のことと思われる。先述のように役銀は正徳元（一七一）年から免除されているから、地子を負担していないという意

味では地子免許は維持されたといえる。したがって、この史料も地子免許維持に密接にかかわる史料であることは他と変わるところはない。

これらの地子免許訴願に関連する文書が宝蔵建設当初から存在したのではないことは当然である。表4に宝永四(二七〇八)年の江戸訴願の時に江戸へ持参した文書のリストを掲げておいた。このうち11と14はこの時の江戸訴願が入会山の争論も伴うものであった(宝蔵二三三〇)。ことによりこのリストに挙がっている。13もその関連ではないだろうか。12については、宝蔵一三三〇の江戸訴願の記録の中に、黒田家の家中に扇子を持参して挨拶に行った記事があるので、その行為のための文書であろう。つまり、11以下は地子免許の証拠文書ではないといえる。したがって、地子免許の証拠文書となりうるものは1から10までであろう。このうちのどれがこの時点で宝蔵保管であったかどうかはわからないが、安永二(一七七三)年時点の宝蔵帳箱保管文書(表3)と比較して少なくとも2・4・5・6・8・9・10の七点は一七〇八年において宝蔵保管であったと考えられる。したがって、あたりまえのことだが、表3の11・12・13の三点の文書がこの宝永訴願の後に宝蔵に追加されたことになる。地子免許維持の訴願行為によっても宝蔵保管文書は増殖していくものであった。

以上のように、宝蔵には、秀吉高札、延宝検地帳、歴代領主の地子免許状(無年貢地証文)のほかに、江戸出願の記録などの文書が収納され、大名の入封や訴願行為のたびごとに増加していたのである。

さて、今検討している目録には追筆部分がある。これにより、安永二(一七七三)年以後にこの帳箱に追加された文書を見てみよう。

まず最初は、表3の7と8の間の「高木井堰裁決状」である。これは、次節で検討する惣年寄引継文書のところで詳述するが、三木川の堰の高さをめぐる隣村高木村との争論の裁決状(延享四(一七四七)年)であり、三木町の地子免

許地の物理的存続にかかわる文書である。そうした重要性から、宝蔵の帳箱に収納されていた時期があったものと思われる。16と17は、注7拙稿で分析した三木町の地子免許の「創られた伝統」に関連する文書である。16は、一八〇〇年前後に惣年寄米川が宝蔵の「莊嚴無之ヲ求」めることを目的として、三木住民に宝蔵への諸道具寄進を勧め、かつ歴代領主の位牌所を惣町として建設したことに伴う文書であり、三木町民から寄進された虫干し行事の祭具が記されている（注7拙稿の付表、宝蔵一四四）。17は、宝蔵の莊嚴を求める過程で叙述された、都市三木の由緒書である。それが虫干し行事の日に宝蔵に献納されている。献納された由緒書そのものは現存しないが、その写しが金物問屋黒田清右衛門家に現存する。⁽¹⁹⁾「創られた伝統」の再編にかかわる文書は、「創られた伝統」の証拠文書とともに保管されることとなったのである。祭具も由緒書も「伝統」の構成要素の一つになったということができる。

このように、宝蔵保管文書は固定的なものではなく、当初の地子免許の証拠文書を基盤として「伝統」の展開に伴って増殖していく性格を持っていた。

最後に、宝蔵とその中の帳箱の鍵の問題に言及したい。「三木町御免許大意録」によれば、御証文箱（表2①）の鍵、及び宝蔵板戸の鍵の二つの鍵は下五ヶ町惣年寄十河家預りであり、宝蔵外扉の鍵は上五ヶ町惣年寄預りである。そして、宝蔵を閉じる際には「封印ハ本要寺と三人合封印仕候事」という「往古之来由」であつたと伝える。⁽²⁰⁾これは二次史料を出典としていること、また鍵の管理権をめぐる争論の叙述のなかで語られているという難点がある。しかし、文化四（一八〇七）年と文化八（一八一）年の二通の上五ヶ町惣年寄文書預かり状（宝蔵九〇・九二）に「宝蔵外鍵」の記載があること、現存の帳箱には錠前が付けられる金具があること、現存の宝蔵の扉は二重になっておりそれぞれに鍵があること⁽²¹⁾から、少なくとも上記三種類の鍵が存在したことは確かである。さらに、重要文書の保管容器・施設に複数の鍵を設け、別々の人間が管理するという方法は三木以外でも見られることからも、「大意録」の記述は信用⁽²²⁾

してよいものと思われる。三つの鍵の管理方法からも、宝蔵保管文書が都市全体の重要文書であることが窺える。

なお、今まで述べてきた帳箱に収納された文書以外に、宝蔵内に文書が保管されていたかどうかについては不明である。しかし、現存の宝蔵文書が全て近世段階から宝蔵に存在していたのではないことは明白である。例えば、世襲の惣年寄十河家の文書が少なからず現存宝蔵文書には含まれているが、これは明らかに幕末から明治にかけて十河家没落後に宝蔵に置かれるようになったと思われるものである。また、次節以後で明らかにするように惣年寄・町年寄・地方町庄屋の手に置かれている文書は、宝蔵とは全く別であった。さらに、宝蔵のなかには上述の「御高札唐櫃」や帳箱のほかに「宝蔵内陣宮殿」と称されるものがあつたこと（注7拙稿付表）、かつ拙稿で明らかにした文書「管理」儀礼としての虫干行事＝太閤・東照宮祭礼の存在も合わせ考えてみると、宝蔵は文書蔵というよりも文字通り都市の存在証明文書＝「宝」の蔵という性格を有していたと思われる。したがって、基本的には、宝蔵に保管されていた文書は帳箱内のもので全てであつたと考えてよいのではないだろうか。とすれば、表2に示されている⑤と⑥の帳箱は、近代以降に宝蔵に搬入されたと解釈されることとなり、時期は特定できないが、虫干行事が近世の太閤・東照宮祭礼から近現代の義民祭（延宝の江戸訴願を行なつた岡村源兵衛と大西右衛門を顕彰する行事）に性格を変化させることに照応して、宝蔵は〈宝の蔵〉から〈文書の蔵〉に変化したということができよう。

三、惣年寄・町年寄引継文書

以上、近世段階の宝蔵保管文書について検討してきた。次に、町役人が日常的に使用する文書について見てみよう。現在の宝蔵文書のなかには、「寛政十一年未四月 兼帯福田与六郎・先役上町弥惣兵衛より請取候諸書物覚」という表題を持つ帳面がある（宝蔵九六）。表紙には表題の左下に「与七郎事与一左衛門帰役被仰付候時」との文字もある。

この帳面全体の構成は以下の通りである。

A 「兼帯福田与六郎より請取候諸書物覚」

B 「先役上町弥惣兵衛より請取候五ヶ町書物」

C 「右同人より請取候上町分書物」

D 「町内三分銀算用詰」の残金書上

E 纏・竜吐水・火事羽織など火消道具および帳面箱の書上

F 別紙貼紙、上町水帳一冊と上町宗門人別帳一九冊の請取書、六月二八日付

福田与六郎はこの時上五ヶ町惣年寄であり、世襲の惣年寄十河与一左衛門は寛政六（二七九四）年に退役し、福井弥惣兵衛が下五ヶ町年寄に就任している。したがって、Aの部分は、寛政二一（二七九九）年に下五ヶ町惣年寄に十河与一左衛門が復帰した時に、それまで上五ヶ町惣年寄福田与六郎が預かっていた惣町文書を引き継いだときの目録である。Bの部分は、下五ヶ町惣年寄引継文書を前職の福井弥惣兵衛から引き継いだ目録である。また、福井弥惣兵衛は上町年寄も兼帯しており、十河与一左衛門もまた上町年寄にも就任したので、同じ福井弥惣兵衛から上町文書も引き継ぐことになった。それがCの部分の目録である。次に、D部分の簡単な財政記録とE部分の道具のリストが、惣町・下五ヶ町・上町のいずれの団体に所属するものかは不明である。最後のFの宗門人別帳はCに列挙された上町引継文書の追加引継を示している。以下、引継目録の内容を吟味していきたい。

1 惣町レベルの惣年寄引継文書

表5 Aは、惣年寄引継文書のうちの惣町文書目録ということができる。

表 5 A 三木町惣年寄引継ぎ惣町文書 (寛政11年)

順番	文 書 名	数量形態	年 代	現存史料番号
1	高木村井堰争論済状	1 通箱入	(延享4)	667
2	三木町屋敷御検地帳写	1 冊	(* 延宝8)	(現存せず)
3	三木町数之図	箱入		* 1572
4	上下十ヶ町入用割帳	5 冊	寛政1~5	1008~1012
5	下五ヶ町入用割帳	合帳 1 冊	寛政1~5	1041-3
6	山郷御札場修復入用帳	1 冊		(現存せず)
7	竜吐水	1 挺		
8	水揚	1 挺		
9	十ヶ町割帳	5 冊	寛政6~10	1013~1017
10	十ヶ町坪割帳	5 冊	寛政6~10	979~981
11	宗門入用割帳	5 冊	寛政6~10	397~401
12	虫干入用割帳	3 冊	寛政8~10	(現存せず)
13	酒造一件書物	—	(* 天明8~寛政7)	* 821~837

1の「高木村井堰争論済状」は延享四(一七四七)年の文書(宝蔵六六七)で、三木川の堰の高さをめぐる三木町と隣村高木村との争論の内済証文である。高木村は用水のためかより強固な堰を求めるが、三木町は強固な堰による洪水の危険性を憂慮し、「石杵」による堰の強化に反対した。三木町の主張の部分を引用する。

一 播磨国美囊郡三木町人同所八幡社僧訴上候者、同国同郡高木村井堰三木川筋二有之処、六年以前戊年(寛保二年—筆写注、以下同じ)六月洪水ニ而流失仕候跡江、高木村新規相企、長拾八間横扣共五間高サ六尺之石杵築立、水門固之杵之上二三尺余之石杵を置、洪水之節茂不押流様ニ丈夫ニ仕立候ニ付、三木之町家北手川筋土砂溜川床高成、洪水ニ者三木之町家并墓所八幡社領田地水押ニ成迷惑仕候間、前々之通杭蛇籠土俵を以井堰築立用水引取、洪水之節者押流、水不用之時節者高木村より取払候様仕度旨書上之候

つまり、三木町にとって問題となっているのは、三木町の物理的存続、つまりは地子免許屋敷地の物理的存続ということになる。これは地子免許の前提として非常に重要であつたと考えられる。この文書の重要性は、このリストのなかでは3の絵図を除けば唯一特別の箱に入つて

いたことから窺える。さらにまた、前項でみたようにこの史料はその写しが、あるいはこの史料そのものが一時的に、宝蔵に置かれた帳箱に保管されたことも、この井堰争論内済証文の重要性を示している。

次に、2の「三木町屋敷御検地帳写」について考える。これは、惣町の文書群に含まれていることから宝蔵保管の正本の写し、つまり十ヶ町分の検地帳の写しである可能性が高い。前項とは異なりここでは「御免許帳」とは呼ばれていないことに注目すべきであろう。内容は同じであつても、地子免許の証拠能力を持たないということを「検地帳」というここでの文書名が表していると考えるのはうがち過ぎであろうか。

4の「上下十箇町入用割帳」と9の「十箇町割帳」は同種の帳簿と考えられ、現存史料の「十ヶ町割帳」（宝蔵一〇八―一〇一二が4、宝蔵一〇一三―一〇一七が9）のことであろう。直近十年分が引き継がれているということがわかる。内容は、三木の惣町の入用を書き上げ、上五ヶ町と下五ヶ町の二つに割賦している帳簿である。なお、文化四（一八〇七）年の下五ヶ町惣年寄引継文書預かり状（宝蔵九〇）に「三木町上下拾ヶ町割帳」が九冊（一七九七―一八〇三年分、一八〇六年分は除く）挙げられていることからすると、この帳簿は双方の惣年寄が同じものをそれぞれに作成し引き継いでいたということになる。

10の「拾箇町坪割帳」（宝蔵九七九―九八二）は、本要寺の折袴料を上五ヶ町と下五ヶ町で坪割負担する帳簿である。内容は全て本要寺に支払われるもので、「日待料」「折袴料」「歳暮」「宝蔵修復入用」などである。本要寺は境内に宝蔵があり、また町役人の寄合が開かれる場でもあつた。また、日待などの行事を通じて本要寺は三木町民の結合の場でもあつたといえよう。この帳簿は寛政六（一七九四）年にさきの「十ヶ町割帳」から分離したものであり、それ以前の本要寺折袴料は「十ヶ町割帳」のなかで処理されていた。

11の「宗門入用割帳」も「拾ヶ町割帳」から分離独立した帳簿（宝蔵三九七―四〇〇）である。こちらも寛政六年か

ら始まるので、さきの坪割帳と同時に始まっている。また、ここで検討している目録には登場しないが、「山郷割」という帳簿も寛政初年に新たに成立した帳簿であり、この時期三木町財政システムに一定の複雑化が見られる。

12 「虫干入用割帳」とは注7拙稿で述べた宝蔵文書の虫干し行事（六月一八日）の費用の書上と十ヶ町への割賦の帳簿であり、これも寛政六（一七九四）年に「十ヶ町割帳」から分離し毎年作成されるようになったものと推定される。十ヶ町分の帳簿であるにもかかわらず、現存帳簿の作成（保管）は上組もしくは下組である。本目録に記載されている寛政八（一〇）（一七九六）（一七九八）年分は残念ながら現存しないが、文化五（一八〇八）年以降の三一冊が現存している。

以上が恒常的な財政帳簿である。そのほかに三木町の存続にとって非常に重要な文書が二つある。一つには6「山郷御札場修復入用帳」がある。「山郷御札場」とは入会山の境界争論の結果建てられた境界取り決めの高札（二七〇七（宝永四）年、宝蔵七四二）の札場のことであろう。その札場の修復入用帳がなぜ惣年寄引継惣町文書に含まれなければならないかについては明確にすることはできない。しかし、入会山の問題それ自体は、三木町にとって高木村井堰と同じくらい重大な意味を持っていた。元文六（一七四二）年の御林山松木菅尺廻り以上の伐採命令に対する反対願書（宝蔵七三四）第七条によれば、

一 先年山本武兵衛様御林山御伐り払被遊候節、平地谷筋無御用捨御伐り被成候二付、平地通りハ御見及被遊候通
草野同前二罷成候、谷筋土地宜敷所ハ小松少々生立候得共、全鉢御林山之儀ハ土地悪敷御座候故、草芝等生立
不申少之雨二而も山走り強ク土砂悪水押出申儀二御座候、依之近年谷々掘レ登り年々土砂悪水押出シ、谷々夥
敷倒レ木出来申儀乍恐御賢察可被下候、就夫去夏度々洪水二而前田町并平山町御田畑所々亡所二及罷有候、其
上悪水平流シ罷成上、田畑江流入悪田二罷成悉ク不作仕り、百姓迷惑仕候儀御見分被遊被下候通二御座候、猶

又三木町之内下五ヶ町之儀ハ前田町御田地統ニ御座候故、去夏洪水之節箕谷・八幡谷・鷹尾山走り町々江落集り、町北ハ川水込入五百軒余之家居悉ク水入ニ罷成、其上前田町御田地ヲ打越、土砂夥敷走セ出之町筋往來難儀迷惑仕候儀、其節御見分被遊候通ニ御座候御事

とある。つまり、松木伐採による山林荒廃は出水をもたらし、それが下五ヶ町に被害を与えるということを三木町側は憂慮しており、この争論も町場存続の問題を含んでいる（他に宝蔵七二八・七三四・七三五も参照）。

もう一つは、13「酒造一件書物」である。酒造関係の文書は現在の宝蔵保管文書に三三件と多数含まれ、寛政一（二七九）年以前のものであっても一件ある。ここでの引継目録の「酒造一件書物」は点数も年代も不明のため文書を特定することはできない。しかし、これは享和三（一八〇三）年の酒造仲間が作成したものと推定される願書（宝蔵八二四）に関連する文書のことと思われる。願書の第三条を以下に引用する。

一寛政元酉年八月從 御公儀様御触書を以被仰出候、古來之株高名目を止、此度御勘定所へ書上候造來り高、向後之株ニ被仰付、其節之休株ハ御差留ニ罷成候事ニ而候得者、請売酒小店之かし株ハ御差留無株ニも相成候へハ、其節よりかし株并入講相止申候、其砌酒請売小店差留可申道理ニ存候へとも、小店商内相止させ候も氣ノ毒ニ存、なをさらに致置候處、近年ハ多分ニ取扱候ニ付、差留之事毎々中間共申出候へとも、人情ニ而ハ難出罷有候處、近比ハ請売酒店我まゝニ相始、仲間へ一応之届も不仕、別而他所酒ニ而或他所之酒造家ニ而貨造を為致、多分ニ取扱候様ニも相聞へ、酒造之者同様ニ商内仕候衆中も出来、不取締ニ罷成私とも從來之得意も相減し、懸方滞多罷成難洪仕候、右鉢之成行ニ而ハ地法も潰、酒株之所金も無之甚歎敷奉存候、且又近年酒造之儀幾重ニも被仰出殊以当年ハ酒造役米之儀上納被仰付奉畏罷有候へハ、右言上仕候地法別而無株ニ而酒商内仕儀不得意存候ニ付、此度請売酒店之衆中へ古來地法之儀無株ニ而酒商売ハ不相成事而已懸合申候へとも、対談

表5B 三木町惣年寄引継下五ヶ町文書

順番	文書名	数量	年代	現存史料番号
1	五ヶ町坪割帳	合帳1冊	寛政6～10	1112
2	五ヶ町諸入用割帳	5冊	寛政6～10	1026
3	五ヶ町諸入用門割帳	3冊	寛政8～10	(現存せず)
4	五ヶ町祭礼諸入用割帳	3冊	寛政8～10	1426,1427
5	宝蔵入用割帳	1冊	寛政10	143
6	分水入用割帳	1冊	寛政10	(現存せず)
7	日待初午入用割帳	?	寛政10～?	(現存せず)
8	宗門人別入用割帳	?	寛政7～?	396,402
9	十ヶ町門割帳	1冊	寛政10	1113

行届不申無拠此段御訴訟仕候、乍恐中古名前をかし候もの、請売酒店一同
二御差留被成下候様奉願上候(後略)

これによれば、仲間外の酒造を問題視し、酒造制限令を契機に仲間統制の再編強化を計ろうとしていることがわかる。このことは①三木町内ではかつての経済的上層の地位の保持、②周辺農村からの三木町酒造業の防衛、という二側面の意図を示すと解釈できよう。このように都市三木の社会構造が大きな変動を迎えていることを示す「酒造一件」は、惣年寄が交代し文書が引き継がれる時に強く意識されたに違いない。引継当時に三木町政にとって重要な問題としてこの一件が認識され、それがゆえにこの一件文書が引継文書に含まれることになったのであるう。

最後に道具類を挙げることができる。7竜吐水と8水揚はいずれも消防道具である。これらの道具が引継文書目録に含まれていることは、惣年寄が都市の守護者としての役割を担っていることを象徴しているといえよう。

2 組合町レベルの惣年寄引継文書

次に、下五ヶ町惣年寄が福井与惣兵衛から十河与一左衛門に交代したときの引継文書を表5Bを見ながら検討していく。これらは組合町レベルの引継文書である。1の「五箇町坪割帳」は現存文書の宝蔵一一二に該当する。表5A10にお

いて下五ヶ町に割賦された惣町入用を五つの個別町にさらに割賦する帳簿である。2の「五ヶ町諸入用割帳」は宝蔵一〇二六に該当し、これも表5A9において下五ヶ町に割賦された惣町入用を個別町に割賦している。4「五ヶ町祭礼諸入用割帳」は現存史料では宝蔵一四二六・一四二七がこれに該当するものと思われる。3「五ヶ町諸入用門割帳」は宝蔵文書には現存せず、惣年寄引継文書との対応関係も明確にはできない。しかし、以上の1から4の帳簿は、最近五年間の用途別もしくは負担基準別の何らかの五ヶ町入用割帳であり、表5Aの「十箇町入用割帳」その他の割帳に対応するものと考えてよいだろう。8「宗門入用人別割帳」（宝蔵三九六・四〇二）も以上と同じ五ヶ町分の割賦帳簿であり、表5A11に対応している。このほかに、本目録には十ヶ町分の帳簿がある。一つには、B5「宝蔵入用割帳」（宝蔵一四三）がある。宝蔵の建具などの費用で毎年作成されるものではない。もう一つには、B6「分水入用割帳」があるが現存せず詳細は不明である。この二種の帳簿の存在から、惣町レベルの帳簿は二人の惣年寄によって分け持たれていたことがわかる。

以上、惣年寄が保管・引継する文書について概観してきた。惣町レベルの文書では、検地帳写、惣町レベルの入用割付帳簿、それに三木町の存立にかかわる文書がある。惣年寄は組合町の長でもあるから、組合町レベルの文書も保管するがそれは入用割付帳簿のみであり、三木町という重層的な構成を持つ社会集団が日常的に運営されていくためだけの機能を持つ財政上の帳簿のみから構成されている。このことは三木における組合町が個別町や惣町にくらべて比重の軽い社会集団であることを示しているといえよう。

3 町年寄引継文書

第三に、町年寄引継文書を検討する。表5Cに掲出する。ただしほとんど現存しないため、全面的な検討は不可能

表5C 上町年寄引継ぎ上町文書(寛政11年)

順番	文 書 名	数量	年 代	現存史料番号
1	上町水帳	1冊	延宝7(明和2写)	574
2	年々勘定帳	1冊	天明2～	
3	上町入用割帳	5冊	寛政6～10	
4	五人組帳之写	1冊	宝暦3	
5	宗門帳	5冊	寛政5～10	
6	坪割帳	5冊	寛政6～10	
7	宗門入用割帳	5冊	寛政6～10	
8	祭礼入用割帳	3冊	寛政7～9	
9	川除入用割帳	1冊	寛政10	
10	町銀集帳	5冊	寛政6～10	
11	本要寺仏餉料集帳	1冊		
12	非人番座頭給米集帳	4冊	寛政6・7・9・10	
13	町内戸口役帳	1冊	寛政8	
14	灯油書上帳	1冊	寛政9	
15	御仕度御請書	1冊	寛政11	
別紙1	上町分水帳	1冊	元文6	
2	上町分宗門帳	19冊	安永2～4、安永6～10 天明2～8、寛政元～4	

である。冒頭に「上町水帳」がくる。これは宝蔵五七四の上町のみの町屋敷地検地帳のことであり、屋敷地所持者の移動を貼紙で把握していくものである。日常的に町年寄の手元に置き使用された検地帳とみてよい。その意味で、宝蔵に保管され通常は利用されない検地帳とは異なり、当然「御免許帳」とは表現されない。つまり、地子免許の証拠文書ではないということである。別紙の1に「上町分 元文六酉年 水帳」が挙げられている。これは元文六(一七四二)年に筆写された延宝検地帳と考えられるので、個別町レベルで使用と保管用の二つの検地帳があったと考えてよいのではないか。なぜなら、以下の様な文書も存在するからである。宝蔵五七二の「播磨国三木郡三木町屋鋪検地帳(写)」は中町のみ、屋敷地帳であり、しかも裏表紙に「中町」とある。中町年寄が引き継ぎ保管していた文書の一つと思われるが、この検地帳には貼り紙が一切ない。中町の保管用の検地帳と思われる。

その他の史料は、五人組帳・宗門帳といった人別把

表6 前田町庄屋引継ぎ文書（寛延3年）

順番	文書名	数量	年代	現存史料番号
1	御田畑御検地本帳	2冊	延宝7	579
2	同本帳之写シ帳	2冊	延宝7	577
3	延宝元年ノ古水帳	1冊		
4	御代々御免状	60本		
5	同御引方帳	36冊		
6	村内明細帳	2冊		
7	御田畑荒帳	2冊		
8	池所樋数帳	1冊		
9	田畑名寄帳	2冊		
10	見取反別帳	2冊		
11	高木村と争論	訴状添状 5本		
12	小絵図下書共	3枚		
13	御年貢取帳	1冊		
14	御検見下帳	1冊		
15	惣高附帳	1冊		
16	村諸入用割帳	1冊		
17	石台計外計棟共	1組		
18	御米計り桶壹斗式升入	1ツ		
19	唐箕	1挺		
20	かけや	2本		

握・支配の文書であり、また個別町の財政帳簿（町入用帳）と推測される「年々勘定帳」がある。これは天明二（一七八二）年以来毎年書き継がれてきたものであろう。これらから、個別町が都市三木における基礎的な地縁的社会集団であることがわかる。また、惣町・組合町の入用割帳・割帳・坪割帳に対応する個別町の入用割賦帳簿があり、上から割賦されてきた惣町入用を個別町の構成員に割賦する機能を果たしていることも窺える。

全体として、地子免許の奥書を持つ延宝検地帳の分枝を中心とした、都市の基礎団体として機能していたことを示す文書群ということができよう。

四、地方町庄屋引継文書

最後に、地方町庄屋引継文書について見ておきたい。表6は寛延三（一七五〇）年七月に前田町の庄屋が勘兵衛から五兵衛に交代したときの引継目録の文書一覧である（宝蔵七五）。目録の冒頭に、検地帳原本とその写が挙げられて

いる。ここでの検地帳は、先に見た検地帳とは全く異なる。さきの三木町屋敷検地帳は地子免許の町方分十ヶ町の検地帳である。ここでの検地帳は、その外側に展開する年貢地の検地帳であり、そこは「地方」の「町」と呼ばれる行政組織に編成されていた。つまり、これから検討する検地帳は「前田町」という村請制の村の検地帳なのである。この村は、村落共同体としての実態は存在せず、その構成員は本来的には全て三木町方の住民であった。

目録冒頭の検地帳とその写しは、現存の宝蔵史料番号では五七九（正本）と五七七（写）に該当すると考えられる。それは、宝蔵五七七の延宝七年「播磨国三木郡前田町侍屋敷検地帳」の末尾に次のような奥書があるからである。

右者延宝五巳之年松平大和守様江被仰付、御家来衆当村御検地被成、其末之十月右御検地帳大和守様より御前様へ御渡被成候二付、於播州庄屋年寄□□□□被召出、右御検地帳御渡被遊、村中百姓共不殘立合御検地帳拝見仕少も申分無御座候二付、此度写帳仕差上ヶ申候、尤前廉被仰渡候通、村中二も御検地帳之写両冊相認、惣百姓中連判仕庄屋百姓手前二差置、本御検地帳ハ箱二入、庄屋年寄百姓中□□□□（相符付入用之カ）時分ハ立合符ヲ切用申候、不及申上銘々百姓持高書写所持仕、右御検地帳面少も申分無御座候二付、写帳二庄屋年寄惣百姓中連判仕差上ヶ申候、若相違之儀写上候歟又ハ御検地帳之儀二付以来不謂御訴訟仕候ハ、如何様二も曲事可被仰付候以上

延宝八庚申正月

前田町庄屋理右衛門 ㊦

同 年寄孫兵衛 ㊦

同 次郎左衛門 ㊦

頭百姓⁽³⁾ 七兵衛 ㊦

（四〇名連印略―寺院含む）

小野長左衛門様

傍線部に見られるとおり、検地帳は「村中」で二冊作成され、一冊は惣百姓中が連判し「庄屋百姓」のもとに置き、もう一冊の「本御検地帳」は箱に入れ封印をし封印を開く場合には庄屋年寄百姓中の立合のもとに開封するというのである。

表6の1の検地帳がここに引用した奥書を持つ検地帳であることは連印があることから確実と見られ、また「庄屋百姓」の手元に置いてあるという記述は、この宝蔵五七七の検地帳の表紙が激しく磨耗劣化損傷していること、また、検地帳本文には多くの名請人のところに多数の貼紙があり、この検地帳によって土地所持者の交代を把握していたことがわかることと符合する。また、この検地帳は、末尾の検地役人の名下には印がなく、その限りの意味で写してある。

一方、表6の2の検地帳は宝蔵五七九がこれに該当する。宝蔵五七九の検地帳は、表紙に使用による劣化がほとんど見られず、名請け人のところに貼紙が全くない。このことは箱のなかで封印保管されていたという記述と合致する。また、検地役人の名下には印が捺されていることは「本御検地帳」との表現と符合する。

すなわち、村で二冊副本を作成し一冊は使用分(宝蔵五七七)、一冊は箱入れ封印すなわち保管用(宝蔵五七九)としたということがわかる。引継目録の方では二冊ずつになっているのはなぜかよくわからないが、そのうちの一冊ずつはこれまでの叙述で説明がつく。

検地帳以下、年貢割付状、年貢引方帳、名寄帳など年貢収納関係の文書が主であり、そのほかは隣村との争論文書

や村入用帳である。村請制の村としての文書が引き継がれていることがわかる。宗門帳が見あたらないのは人別にかかわることは町年寄の職務であって、地方の町の庄屋のもとにはそもそも宗門帳が存在しないからである。「村諸入用割帳」もこれまでみてきた町方の割帳とは関連をもたない文書であろう。入用の体系が「町方」と「地方」では別になっていると思われるからである。このように町方の引継目録と記載されている文書が大きく異なる。これは、言うまでもなく、地方町庄屋の機能にもとづくもので、町年寄や惣年寄との違いが明白である。引継目録に載せられる文書以外の物品も、町方が火消道具であったのと対照的に、年貢収納のための計量器具や脱穀機であることも当然のことながら興味深い。

ここでは特に、地方の文書が検地帳正本ですら宝蔵に保管されないということに注目したい。都市三木全体は町方十ヶ町と地方六ヶ町から成っている。元禄一六（一七〇三）年の宝蔵保管文書の「管理」の取り決めに地方町庄屋が連印しているのもそのためであろう（宝蔵八九）。しかし、地方の文書は宝蔵文書とは全く切り離されて「管理」されているのである。これは「地子免許の町方」の自己認識の裏返し現象であろう。宝蔵があくまでも三木が地子免許の町方であることを主張するための施設であることの証左となっている。

おわりに

これまで見てきたとおり、近世後期の三木町の文書のうち、宝蔵保管文書、惣年寄引継惣町文書、惣年寄引継五ヶ町文書、町年寄引継文書、地方町庄屋引継文書の構成が明らかになった。当然、これだけで三木町の運営が行われていたわけではなからう。それは、現存宝蔵文書と比較すれば明白である。しかし、基本的な構造は明らかになったものと思われる。すなわち、三木町の文書「管理」体系は明らかに宝蔵を中心とした同心円構造をとっており、最外縁

部の地方町庄屋文書は宝蔵から除外されているとすら言える。宝蔵文書は、地子免許維持の証拠文書に、地子免許維持のための文書「管理」儀礼（由緒書を含む）の中核的文書を追加したものであった。惣年寄の引継文書は、惣町レベルにせよ五ヶ町レベルにせよ、惣町入用を割賦していくための帳簿が量的には主体であった。しかも、寛政六（一七九四）年以後は、文書「管理」儀礼を行うための入用帳簿が独立して作成されるようになる。これは、宝蔵そのものを維持し、宝蔵を社会的に維持する行為（虫干し行事）を継続していくための文書ということが出来る。また、検地帳に即して述べれば、地子免許地である十ヶ町の検地帳の正本は、末尾に地子免許文言があることから、地子免許の証拠文書となり、宝蔵に保管されていた。このことにより、この検地帳は、検地帳一般の機能を担うというよりも、都市三木の宝物となり、「御免許帳」という文書名称が与えられたのである。惣年寄の引継文書には宝蔵保管の検地帳の扣があった。また、個別町レベルの町年寄の手元には、宝蔵保管検地帳の当該町分の検地帳が二冊存在し、一冊は使用、一冊は保管用であり、検地帳一般の機能を担っていた。地方町庄屋の検地帳は三木町の地子免許とは全く無縁の存在で、都市三木を構成する一部の検地帳でありながら、宝蔵とは断絶して保管・使用される検地帳であった。以上のような意味において、三木町では宝蔵をあくまでも中核においた固有の価値序列に基づいた「管理」が見られるということができよう。

このような事実は、現用・非現用といった現代の史料管理学の概念からの区分がなじまない文書の当時の区分けを示しており、したがって、例えば近世村落の文書管理に関して「今日の文書館制度的なシステム」と評価すること⁽²⁴⁾とは全く別の側面が存在することを示唆している。文書管理史という限定された関心からは見えにくい、文書「管理」の様相が浮かび上がってきたということだけは少なくともいえるのではなからうか。

認識がここに至れば、人間が文書を純粹な意思伝達や記録の手段としてのみ取り扱うことを前提とした、あるいは

文書を人間主体の認識対象として客観視することのみを前提とした、管理という概念をそのまま用いることに幾分かの問題性がはらまれていることは明白である。本稿で、とりあえず管理に鍵括弧を付して使用した理由はここにある。

〔注〕

- (1) 富善一敏「近世村落における文書整理・管理について」
〔記録と史料〕二、一九九一年、保坂裕興「村方騒動と文書の作成・管理システム」〔学習院大学史料館紀要〕六、一九九二年、同「近世五郎兵衛新田における記録管理と村政」同上七、一九九三年、富善一敏「近世村落における文書引継ぎ論と文書引継ぎ・管理規定について」〔歴史科学と教育〕一二、一九九三年、同「検地帳所持・引継ぎ論と近世村落」〔関東近世史研究〕三八、一九九五年 など。
- (2) 中野美智子「岡山藩政史料の存在形態と文書管理」〔吉備地方文化研究〕五、一九九三年、山崎一郎「萩藩当職所における文書の保存と管理」〔山口県文書館研究紀要〕二三、一九九六年
- (3) 大谷明史「三井両替店の帳簿とその管理方式」〔経営と史料〕八、一九八四年、鶴岡実枝子「商家文書の目録編成」〔史料館編「史料の整理と管理」、岩波書店、一九八八年〕。
岩淵令治「問屋仲間の機能・構造と文書作成・管理」〔歴史評論〕五六一、一九九七年。
- (4) 高橋実「近世における文書の管理と保存」〔青山英幸・安藤正人編「記録史料の管理と文書館」北海道大学出版会、一九九六年〕。
(5) 大友一雄「近世村落における文書管理と文書認識」〔史料館研究紀要〕二三、一九九二年、
(6) 河内将芳「近世京都における町共有文書の保存と伝来について」〔地方史研究〕二三七、一九九二年、同「近世京都における都市史料の管理をめぐって」〔歴史評論〕五六一、一九九七年。
(7) 拙稿「近世都市における史料管理儀礼と由緒―播州三木町を事例として―」〔吉田伸之・久留島浩編「近世の社会集団―由緒と言説―」山川出版社、一九九五年〕
(8) 大友一雄「富善大会報告に関する若干のコメント」〔関東近世史研究〕三八、一九九五年 がすでに同様の指摘をしている。
(9) 杉森哲也「町組と町」〔高橋康夫・吉田伸之編「日本都市史入門」Ⅱ、東京大学出版会、一九九〇年〕
(10) この点については、田中克行「村の紛争解決と共有文書―文安年間、菅浦・大浦の相論」〔勝保鎮夫編「中世人の生活世界」山川出版社、一九九六年〕に示唆される点が多か

った。

- (11) 永島福太郎編集責任「三木町有古文書」(青甲社、一九五二年) 所収の「三木町有古文書目録」の番号を以下このように略記する。本文書群は三木市立図書館と国文学研究資料館史料館において写真帳により閲覧することができる。なお、三木郷土史の会編「三木市有宝蔵文書」(三木市、一九九四年)において本文書群の全点翻刻が進行中である。
- (12) 例えば「三木市史」(一九七〇年)。以下「三木市史」に拠る場合は特に注記しない。
- (13) 小島道裕「織豊期の都市法と都市遺構」(「国立歴史民俗博物館研究報告」八、一九八五年)
- (14) 注7拙稿参照。
- (15) 永島福太郎「町方と地方」(「国史学」五七、一九五二年)
- (16) 唐櫃に入れるという行為自体が特別な意味を持っていた可能性はある。葛谷利春「明治維新に於ける飛騨取公について」(「信濃」二九一五、一九七七年)には、明治元年の飛騨鎮撫使竹沢寛三郎の飛騨入国の行列に「勅書白木唐櫃」があったという事実が記されている。また、注6の河内氏第二論文にも「御朱印」が唐櫃に入れられ行列を組んで運ばれた事実が指摘されている。ある種の「威光」を示す容器として認識されていたのかもしれない。
- (17) 注7拙稿参照。
- (18) 「三木町御免許大意録」(永島福太郎編「三木金物問屋史料」思文閣出版、一九七八年)

(19) 同前書。

(20) 同前書四二九頁。

(21) 外扉の鍵は、現在も三木市総務部総務課文書係が使用している。

(22) 喜多村俊夫「日本灌溉水利慣行の史的研究・総論編」(岩波書店、一九五〇年)には次のような記述がある。「近江国阪田郡姉川の出雲井堰の水を受ける大原村の中、江戸期以来他領四ヶ村と総称せられ、彦根領に属していなかった為に、常に彦根領側村々の圧迫を被り、之にすべて團結對抗せざるを得ない地位に置かれた下夫馬・上夫馬(朝日)・地下・本庄(天満)の村々は、其の引水権を主張する根拠としての水利史料の保存に特別に意を用い、今に其の大部分を伝えているのであるが、四ヶ村の地位に鑑みて其の保管には特別入念なものがあつた。即ち文書を収める小型の長持は二重・三重の嚴重な包装を施し、其の蓋の裏には例年四ヶ村惣代が参詣して祈祷を受け来つた遠州秋葉神社の火災除けの神符を祀り、最後の懸け縄の封印には四ヶ村惣代の印を押して、四ヶ村惣代立会の下でなければ決して開け得ないものとなし、尚飯令封を切り得るとしても、内外四個の鍵は四ヶ村夫々の分ち保管する所で、例年八月、年一回の虫干しに四人の惣代の一堂の下に相会する時でなければ開き得ない仕組になっていた如きは、秘密の保存に払っていた関心の程を察せしむるに足るものがある。因に右の文書を納めた長持は、火災に備えて容易に一人で背負い

出し得る如き様式になっていることも附記するに足るであろう。」(七頁、新字・新かなづかいに変更)

また、遠くイングランドの都市共同体としてのロンドン(City)においては、国王から獲得した特許状(Royal Charter)を保管するための鉄製の箱が作られていた。一五世紀前半ではその箱には六つの鍵が掛かるようになっており、市長や複数のEldermanにより分け持たれていたことが明らかになっている(Penelope Eames, An Iron Chest at Guildhall of about 1427, *The Journal of Furniture History*, x, 1974 また Corporation of London Record Office Research Paper 8.19.1 も参照)。

(23) ここでの「頭百姓」四名と「小百姓」八二名の性格については未検討である。可能性としては、町方十ヶ町の家

持で地方に土地を所持するものが「頭百姓」、「小百姓」は町方の地借・店借で地方にのみ土地を所持するものということが考えられる。しかし、近隣村落の百姓で三木町の地方部分に土地を所持する者が存在する可能性も否定できず、詳細は不明である。

(24) 大藤修「史料と記録史料学」(「記録と史料」一、一九九〇年)

〔付記〕一九九五年七月一八日の三木義民祭(虫干し行事)にあたり、三木市有宝蔵内の調査を許可していただいた三木市総務部総務課文書係長村上均氏、また義民祭の見学をご許可いただいた本要寺住職小谷泰進氏に篤く御礼申し上げます。

